

産業能率大学

→ SANNO UNIVERSITY

ジェネリックスキルのさらなる獲得に向け 1年次アクティブラーニングを 新たなステージへ改革中

産業能率大学のアクティブラーニングは、明らかに日本の大学の先頭を走ってきた。それが今、第二ステージに移行しつつある。多くの大学では、アクティブラーニングの導入が始まったところ、あるいは定着し始めたところであるが、その先を行く産業能率大学の取り組みについて紹介する。

取材・文／教育ジャーナリスト 友野伸一郎 撮影／広路和夫

アクティブラーニングで 何が身についたか検証

産業能率大学では、「初年次ゼミ」で株式会社コーセーとタイアップして、プロモーションのビジネスコンテストに取り組むなど課題解決型の「高次のアクティブラーニング」に取り組んでいる。この「初年次ゼミ」を起点に4年間連続して「高次のアクティブラーニング」に取り組むカリキュラムが導入されているのが同学の特徴であり、学生の学びに対する積極性が向上するなどの大きな効果を生みだしてきている。普通の大学であれば、それで十分と考えるところだが、産業能率大学はそこから先が違った。

同大学では、このアクティブラーニングを中心としたカリキュラムで何が身についたかを検証しているのである。

まず、アクティブラーニングを考える前提として、教授者中心の教育から学習者中心の教育への、教育観の転換がある。授業を通じて学生に何が身についたかを重視する観点だが、現在の日本の多くの大学では、そもそも学生にどんな能力を身につけさせるのかの、教育目

標すら明確に設定されていない。また設定されていたとしても、その能力がどこまで身についたかを評価・測定しているところは未だほとんどないというのが現状である。このことは、アクティブラーニングのカリキュラムを何年か後に評価し、それを改善していくPDCAサイクルが機能していないということを意味している。肝心のCHECKが行われていないのだ。

PROGテスト導入 1年次から3年次の伸びを測定

産業能率大学が、学生の能力の伸びを評価・測定するために導入したのが、ジェネリックスキルを測定するPROGテスト（河合塾・株式会社リアセック共同開発）である。アクティブラーニング科目で身につける能力として、各科目の持つ専門性に加えてPROGテストが規定するジェネリックスキルの能力であることを明確にしたのだ。

リテラシーとしての【問題解決力】に括られる「情報収集力」「情報分析力」「課題発見力」「構想力」、コンピテンシーとしての【対人基礎力】に括られる「親

和力」「協働力」「統率力」、【対自己基礎力】に括られる「感情制御力」「自信創出力」「行動持続力」、【対課題基礎力】に括られる「課題発見力」「計画立案力」「実践力」の13の能力である。

同大学がPROGテストを導入してから今年度で3年目。1年次と3年次に全学生が受験することでスコアを比較し、13の能力の2年間の教育における学生の「伸び」を測定したのである。

これらの13の能力の育成を掲げ、それがどこまで達成されたのかをPROGテストで検証するというPDCAのサイクルが、ここでつながったわけである。

図1 PROGテストが測定するジェネリックスキル

リテラシー	問題解決力	情報収集力
		情報分析力
		課題発見力
コンピテンシー	対人基礎力	構想力
		親和力
		協働力
	対自己基礎力	統率力
		感情制御力
対課題基礎力	自信創出力	
	行動持続力	
	課題発見力	
	計画立案力	
		実践力





① 杉田一真 准教授

公共圏他者と協働する力、 考え抜く力をもっと伸ばすには

そこで明らかになったことは何か。

産業能率大学の「初年次ゼミ」改革の中心を担っている杉田一真准教授は次のように語る。「学生たちの協働力が、大学が期待したほどには大きく伸びていませんでした。もちろん、PROGテストの全国平均や経営学部平均と同程度かそれ以上ではあるのですが、私たちが期待したほどではなかったのです」と。

一般に産業能率大学に入学する学生は、対人スキルが高い。それに加えて、1年次と2年次のアクティブラーニングでグループワークなどにみっちり取り組む。だから、この能力はさらに大きく伸びている筈というのが、大学側の期待だったのである。

また、学生のフィールドワークを強化してきたことによって、学生は調べたことを10分程度のプレゼンテーションとして発表する能力は極めて高いレベルに達している。しかし、専門知識を活用して考え抜く力(対課題基礎力)については、大学が期待したほどまでには高まっていなかった。

この結果を産業能率大学はどのように分析したのか。

「協働力に関して言えば、これまで本学のアクティブラーニング授業におけるグループワークは、同じ学部の同じ学科の顔見知りの学生とチームを組んで取り

組むものがほとんどでした。そしてこれだけでは協働力は大きく伸びないので」と杉田准教授は語る。

つまり、これは社会学的な用語でいえば近親圏他者との交流であり、それがいくら密になっても、考えも文脈も異なる場合が多い公共圏他者と協働する能力が高まることにはならない、ということである。

そうした分析から、同大学では来年度からの「初年次ゼミ」の内容を次のように変更しようとしている。即ち、学内チームのみの協働ではなく、学外に協働の対象を広げ、学外の協力企業の社員から学生たちがヒアリングをして情報収集・分析をするという取り組みである。

つまり、ここでは「協働力」というコンピテンシーとともに、「情報収集力」「情報分析力」というリテラシーも合わせて高めるように、獲得させたい能力に対応した教育内容の高度化を図ろうとしているのである。

また、「考え抜く力(対課題基礎力)」に関して言えば、教員による授業力のさらなる高度化が求められるようになってきたと杉田准教授は指摘する。

これは、アクティブラーニングにおいては講義する力よりもコーディネートする力が教員の側により求められるとされているが、そのような段階からさらに一歩進むものだ。

具体的には、学生がグループワークで考えた内容に対して、より深い専門性から異なる視点を提示し、学生が考え抜くためのきっかけを与えるといった、従来の一方的な講義力とは異なる、双方向的な講義力を高めることが2014年度の課題として意識されているのである。

「他者に教える者が一番身につく」 SA制度の改革

もう1つの大きな改革は、SA(スチューデントアシスタント)制度の教育システムとしての高度化である。これまで同大学ではSA制度が導入されていたが、教員のサポートが主な役割だった。これを

学生のサポートが主な役割になるように変更する計画である。先生の手伝いだけでなく、コーディネーターも担うようにするわけである。

この新しいSAの役割はすでにスタートしており、具体的には来期のプログラムを、第一にSAが自分が1年生だったらという視点で検証し、第二に自分がSAとして授業に入った時にどのような付加価値が発揮できるかを、SAを担う学生たちが検証している。

そして、これはSAを担う学生たちを育成するプログラムでもあることに注目したい。他者に教えることで、内容が最も身につくからである。

「与えられた情報」 「期待された答」を超えて

このような取り組みを通じて同大学のアクティブラーニングは明らかに、次のステージに移行しようとしている。

これまでも同大学では、積極的にアクティブラーニングを行ってきたが、今までは教員がワークシートを共有化して、アクティブラーニングの内容を平準化することが課題である段階だった。その段階では、これまで教員が一方的な講義でしゃべっていたことを、学生への「問い」として投げかけ、学生がその問いを考えることによりアクティブラーニングが機能してきたのである。その材料はあくまでも教員から提供されるものであり、期待される「答」も存在していた。

しかし、第二のステージで目指しているのは、学生自身が材料を集め、複雑な情報から必要な情報を選び分け分析していく、いわば社会に出れば正面から問われる能力そのものである。加工され与えられた情報を基に期待される答に至るのではなく、一次情報から考える解のない問題に挑むという、本来の高次のアクティブラーニングの目標に正面から挑戦しようとする試みである。

このような産業能率大学の、アクティブラーニングの新たなステージへの挑戦に注目したい。

COLUMN!!

KOSÉと協働し、 1年生全員が高次のアクティブラーニング！

経営学部1年生全員必修の「初年次ゼミ」は、株式会社コーセーとコラボした課題解決を目指す高次のアクティブラーニングである。全員が5~6人のグループに分かれ、まず、4月に行われるオリエンテーションキャンプでは「コーセーの『肌極(はだきわみ)』をお母さんに買ってもらうにはどうしたらいいか」のアイデアを競う。そして前期の授業に入ってから、「大学生をターゲットに『肌極』のプロモーション戦略を考える」というテーマで、課題抽出→仮説設定→コンセプトメッセージを策定し、7月にはプレゼンテーションで競いあう。プレゼンの場にはKOSÉの事業部や宣伝部の方々も審査員として多数参加。さらに、1年後期の「初年次ゼミII」では、さらにプロモーションプランに落とし込み、学園祭で発表。優勝チームはテレビ西日本がCMに作りあげるといふもの。学生同士のコラボ(協働)はもちろん、教員のコラボ、クライアントとのコラボで組み立てられた、全員が「深い学び」を実現できるアクティブラーニングである。



千葉・松戸市立松戸高校 「わく-WORK-INTERVIEW」に学生が出前授業

市立松戸高校では、高校1年生に将来と仕事のことを考えさせる目的で、例年「わく-WORK-INTERVIEW」という取り組みを行っている。これは生徒が冬休みに保護者や周囲の大人に仕事のことについてインタビューするという宿題だが、2013年12月には、その前に「どうやってインタビューをしたらいいか」をテーマにアクティブラーニング型授業が行われた。そこに産業能率大学の学生14人が、講師として派遣されたのである。学生たちの多くは、課外講座である「ジェネリクススキル養成講座」で学んでおり、自分が身につけた親和力や計画立案力などのスキルを使って、生徒たちにインタビューや質問の方法を教え、アクティブラーニングとして体験させようという試みだ。授業後に学生たちは「私たちがメインで話すのではなく、どうしたら高校生が自分で考えてくれるかを意識しました」「2人で担当したので、そのために協働力を発揮するように心がけました」などと口々に振り返った。また、同高校の椿仁三千教諭は「高校1年生にキャリアを考えさせるには、何年か後の自分の姿に重なる大学生が適任なのですが、みんな期待以上で生徒たちの反応が違いました」と語る。これも、学んだことを活かすことでさらに深く身につける産業能率大学のアクティブラーニングの一環なのである。

